
iの証明

立川マナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

iの証明

【Nコード】

N0836Q

【作者名】

立川マナ

【あらすじ】

「彼女」と付き合い始めてまもない「俺」。「彼女」の部屋で勉強会をすることになったのだが、それどころじゃなくて……

*深い意味も何もない、べたべたラブラブな短編恋愛小説です。何も考えずにくすつと笑ってやってください。

「こら、どこ見てるの？」

彼女の深みのある漆黒の瞳が、ばちりとこちらに向けられた。珍しくむっとした表情。責めるような視線。それでも、いじけた子供のような可愛らしさがある。

化粧いらすの雪のような白い肌。暖房のせいか、やや赤らんだ頬。それよりも紅く染まったふくらとした唇。とがった顎の影が落ちるほっそりとした首筋。

気づけば、見惚れている。——高校の入学式で初めて彼女を目にしたときのように。

艶のある黒髪の間からのぞく耳たぶまで愛おしく見える。重症だ。

「いや」と、間拔けな声がこぼれた。「その……」

まさか、お前の横顔に見とれていた、なんて恥ずかしすぎて言えるわけではない。俺はすぐさま彼女の視線から逃げるように顔をそむけた。

「……この数式……」

咄嗟に、そんな言葉でごまかしていた。逃げるようにずらした視線の先にあったのが、暗号のような数字と記号の羅列だったからだ。考えもなしに、持っていたシャーペンの先でそれを指し、俺は口ごもった。適当に、質問をでっちあげることもしかない。——当然だ。ずっと彼女の横顔を眺めていた俺は、これ——真っ白なローテールブルに広げられている数？のノート——には、ちらりとも目をくれていなかったのだから。このページが果たして、来週の試験範囲なのかどうかもあやしい。

せっかく、彼女が「勉強会をしよう」と部屋に招いてくれたつてのに……何してるんだ、俺は。

「ん？」

そんなこととはつゆ知らず、彼女はふっと微笑を浮かべ、斜め横

に座る俺に身を寄せるように体を近づけてきた。

身震いのようなものがした。

入学式で見初めた彼女が隣にいる。それは信じられない出来事で、奇跡にも思えて……高校三年の冬、こうしてやっと付き合いたせたといつても、高まる鼓動を抑えられない。もうキスもしたし、一線を越えたことはないが、夜を共にしたことだつてある。今更こんなことで——そうは思つても、男としての本能は冷静になることを知らないようだ。些細なことでも、身体は彼女に反応してしまう。

「これ、練習問題の答え？ 複素数の問題だね。どれどれ……」
肩が触れるか、触れないか。その距離で、彼女がぼつりとつぶやいた。

放射線状にのびたまつ毛が、黒珊瑚のような瞳を上半分だけそつと隠す。やや伏し目がちの彼女の横顔は、いつにも増して色っぽかった。といつても、それは決して『淫猥』なわけではなく、絵画にでてくる女神のような高潔さもしつかり兼ね備えている。これがもし、幻術か何かの類で、彼女が悪魔の手先だとしても……俺は喜んで騙されて魂を差し出すことだろう。

ああ、だめだ。勉強できる状態じゃねえや。全然関係ないことばかり頭を巡つて、それを妄想の域に止めておくだけで精いっぱいだ。ちよつとでも身体を動かしたら、このまま彼女を押し倒しそうで……

「だめだよ！」

「！」

心臓がびくついた。すみません、と思わず叫びそうになった。

あまりに絶妙なタイミングに、彼女に心を読まれたのかと思つたが、もちろん、彼女にそんな力があるわけはなく、

「ここ、間違つてる」

そう言つて、こちらに見向きもせず、彼女は俺のノートの数式を指差した。無論、それはつい先刻俺がシャーペンで指したのと同じものだ。

バレないようにひっそりと安堵のため息を漏らす。

だめ、て…… そうだよな、勉強のことだよな。まさか、俺の頭の中で繰り広げられている、理性と本能（煩惱？）の熱いバトルに気付くわけではないよな。

「ま、間違ってる？」と返す俺の声は上擦っていた。

愛おしい彼女の横顔。春に咲くどの花よりも芳しい彼女の香り。俺の意識は、感覚——特に、視覚と嗅覚——に集中していた。そして、触覚が刺激を求めている。その渴望が、彼女を抱きしめたときに感じたぬくもりと柔らかさを、記憶の底からひっぱりだして甦らせる。もう一度味わいたい、という欲望が募ってしまう。

こんなことがバレたら、即刻フラれるだろうか。

「だって、ほら、^{あい}iが無いもん」

「へえ……」

下手な相槌だ。話を聞いてないのはバレバレだな。

「もう、ちゃんと聞いているの？」とすぼめた唇もまた魅力的だ。艶やかで柔らかかそうで……触れなくなる。こんな彼女が隣にいて、どうやって勉強しろ、ていうんだよ。

「ねえ、あのさ」しばらく黙っていると、彼女は遠慮がちに切り出して、こちらに振り返った。「ⁱiが何か、分かってる？ 説明でき

……」

急に言葉を詰まらせた彼女。その表情が固まった。

彼女が振り返って、予想以上に至近距離だったことを知る。鼻の先がかすかに触れるほどだった。

動けなくなった。いや、動きたくなかったのかもしれない。

彼女の頬が赤らんでいくのが分かった——暖房のせいじゃないだろう。俺の姿を閉じ込めた瞳が潤んでいく。唇がきゅっと結ばれ、頬がこわばる。困ったような表情。恥じらうその姿に、俺の胸はさらに高揚した。

「えっと」と、自信無げな声を漏らし、彼女は視線を泳がせる。「その……だから」

「アイが何か、だよな？」

囁くように訊ねると、彼女ははつと目を丸くした。いきなり真剣になった俺の声に驚いたのだろうか。

俺は微笑して、低い声で続ける。

「ちゃんと分かっているよ。——いつも、感じてるから」

頬を紅潮させて上目使いで見つめてくる彼女。みぞおちのあたりで何かが燃え滾るのを感じた。我慢できるわけがなかった。床に突っ張っていた右腕が浮いて、彼女の頬へと伸びていく。

彼女に抵抗する様子はかけらもなかった。滑らかな頬の感触を右手に感じつつ、さらに顔を近づける。潤んだ瞳が目の前に迫る。

「そう……なんだ」そのぎこちない動きを感じられるほどに、唇は今にも触れそうだった。「じゃあ、説明……できる？」

「ああ——できる」

頬に触れた手を彼女のうなじのほうまで滑らせる。艶のある黒髪が俺の手をくすぐった。そのまま彼女を引き寄せ、勢いのままに唇を重ねる。

その説明に、数式も言葉も必要なかった。

窓の外、ベランダによりそうようにのびた大樹。その枝の先で春の息吹を待つ桜のつぼみが、一足先にそれを味わう俺たちをのぞいていた。

あとになって、「二度と君と勉強会はしない」と宣言されたが……後悔はなかった。どうせ、彼女のそばでは、愛が邪魔して勉強なんてできないことは、今日はつきりと証明されたのだから。

しかし……なんで数学に『アイ』なんて言葉がでてきたんだ？

その謎が残ったまま、俺は試験にのぞむことになった。

（後書き）

結局、ダジャレです。すみません。

試験勉強でお疲れの皆さまの、ちょっとした息抜きにでもなれば、
なんて思っ書き始めたものです。

こんな妄想でもして、頭を休めてみるのもいいのではないでしょう
か。

とりあえず、おやしギャグの件はお許してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0836q/>

iの証明

2011年1月16日19時20分発行